

2026. 3. 15 (日) マタイ 27:45~56

27:45 さて、十二時から午後三時まで闇が全地をおおった。

27:46 三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

27:47 そこに立っていた人たちの何人かが、これを聞いて言った。「この人はエリヤを呼んでいる。」

27:48 そのうちの一人がすぐに駆け寄り、海綿を取ってそれに酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けてイエスに飲ませようとした。

27:49 ほかの者たちは「待て。エリヤが救いに来るか見てみよう」と言った。

27:50 しかし、イエスは再び大声で叫んで霊を渡された。

27:51 すると見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。地が揺れ動き、岩が裂け、

27:52 墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる人々のからだが生き返った。

27:53 彼らはイエスの復活の後で、墓から出て来て聖なる都に入り、多くの人に現れた。

27:54 百人隊長や一緒にイエスを見張っていた者たちは、地震やいろいろな出来事を見て、非常に恐れて言った。「この方は本当に神の子であった。」

27:55 また、そこには大勢の女たちがいて、遠くから見ていた。ガリラヤからイエスについて来て仕えていた人たちである。

27:56 その中にはマグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子たちの母がいた。

#### <説教>

先主日には、主イエス・キリストが総督ピラトの兵士たちによって十字架につけられ、人々から嘲られるのしられたたことを見ました。兵士たちは既に嘲っていましたが、更に通るすがりの人々が、祭司長たち、律法学者たち、長老たちが、そして一緒に十字架につけられた二人の強盗たちまでもがイエスを嘲りののしりました。「自分を神の子だと言っているのだから、十字架から降りて自分を救え。神に救い出してもらえ」等々。しかしイエスはそんな悪魔の誘惑に打ち勝たれました。〈ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、…自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われ〉(I ペテロ 2:23-24)しました。〈私たちの罪のために死なれ〉(I コリント 15:3)しました。「神の子」イエスは、人としても父なる神のみこころに完全に従い、〈十字架の死にまで従われました〉(ピリピ 2:8)。本日の聖書にはそのイエスの死の間際の様子が記されています。

〈十二時から午後三時まで闇が全地をおお〉いました(45)。この昼間の異常な〈闇〉は、もちろん神が起こされた超自然的な闇です。その示すところは、イエスを神の子、キリストと認めず信ぜず、頑なな肉の思いのままにイエスをあなどり(そうやって神をもあなどり)、十字架で殺してしまおうという人間の限りなく深い罪、霊的暗闇です。そしてその頑なな人間の罪に対する神の怒り、審判です。神はかつて頑なに神に逆らいイスラエルの民を解放しようとしなかったエジプトに対する9番目のさばきとして闇をお送りになりました(出エジプト 10:21-23)が、それと同じ様です。また(欄外注にもあるように)、アモス書にも神に逆らうイスラエルの民に対する神の審判としての闇が預言されていました。

〈その日には、——神である主のことば——わたしは真昼に太陽を沈ませ、白昼に地を暗くする〉(アモス 8:9)。そういう(旧約)聖書のみことばに思い至った人がそのときその場にいたかどうかは分かりません。少なくともその闇の中で悟って悔い改め、イエスを信じた人はいませんでした。それほど人間の霊的暗闇は深いと言うことでしょう。

そしてこのときそんな人間の霊的暗黒、罪に対する神の怒りと審判を全て、真面(まとも)にお受けになったのが十字架上のイエスでした。〈三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である〉(46)。これも欄外注にあるように、詩篇 22:1 のことばです。ですから神に向かってのイエスの「叫び」とは祈りだったと言えるでしょう(確かに午後三時はユダヤ人や神を恐れる人の「祈りの時間」でした(cf.使徒 3:1、10:30))。なお同じ詩篇 22 篇の中では〈私を見る者はみな私を嘲ります。口をとがらせ頭を振ります。「主に身を任せよ。助け出してもらえばよい。主に救い出してもらえ。彼のお気に入りなのだから。」〉(7-8)、また〈彼らは目を凝らし私を見ています。彼らは私の衣服を分け合い私の衣をくじ引きにします。〉(17-18)ともあります。これらも既に見たようにこのとき成就したことです。

このように神から見捨てられたイエスは、「私たちの罪をその身に負われ」て私たちの身代わりとして十字架で神の怒り、刑罰をお受けになったイエスです。このとき神はイエスに対しては慈しみ深い父としてではなく、「ご自分に対して犯された罪に怒り、罪人を呪い、地獄の刑罰を下す審判者」として立っておられました。イエスはこのとき義なる神に裁かれ、有罪宣告を受けて刑罰を受けるべき人として神の前に立っておられました。そういう私たち罪人の側に立つ人としてイエスは神から見捨てられました。確かに私たちは自分の罪の重さを、限りなく罪深いことをもちろん自ら認めなければなりません。その罪に対する神の怒りを、神から永遠に見捨てられることの大きさ恐ろしさ、絶望を知らなければなりません。しかし私たちはそれらを「完全に、正しく」知り尽くすことができません。それもまた私たちの罪の故です。しかし神の子であり、父なる神と全くひとつであったイエスだけが人としてもそれらを正しく、完全に知っておられました。そういうイエスが、私たち罪人の側に立ち、私たち罪人とも全くひとつになってくださり、私たちが本来受け、味うべき霊的苦しみ、暗黒を私たちの代わりに、私たちのために経験してくださいました。それが、父なる神の御意思(みこころ)だったからです。

そんなイエスの御声も、霊的暗黒のただ中にいる人々の心には響きませんでした(47-49)。ただの「泣き言」に聞こえたのでしょうか。しかし父なる神の御意思を喜んで完全に成し遂げられたイエスは〈再び大声で叫んで霊を渡され〉ました(50)。ルカ(23:46)によれば、「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」ということばでした。これは父なる神から委ねられた贖罪のみわざ、〈死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するため〉(ヘブル 2:14-15)のみわざを「完了した」(ヨハネ 19:30)イエスの「勝利のことば」です。先の「わが神、わが神、…」ということばも詩篇 22 篇のものであるからには、やはり神への「賛歌」(表題)であり、「主が義を行われた」(22:31)という勝利者なる神への賛美のことばです。神に見捨てられ、罪に対する神の怒りの刑罰を完全に受けて「自ら十字架の上で」死ぬことによって、悪魔に打ち勝ち、悪魔を滅ぼし、信じる私たちを死の恐怖か

ら解放するという「悪魔と死に対する勝利者なる王」、これが十字架で死なれたイエス・キリストです。そのことは三日後の復活によって一層確かに明らかにされます。それで、51～54節はそういうイエスの勝利の結果としての視点で記されていると言えます。

〈神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂け〉(51)ました。〈神殿の幕〉は、神殿の聖所と至聖所を隔てる幕で、至聖所には大祭司が年に一度だけ犠牲の動物の血を持って入り、民の罪を贖っていました。犠牲の動物の血なくしては民が神に近づき、神と交わることができませんでした。それで、神殿の幕が裂けたことは、イエスの十字架の死こそは旧約の儀式が予表していた罪の贖いの成就だったことを意味し、私たちがイエスのおかげで大胆に神と交わることが許されるようになったことを意味しています。〈地が揺れ動き、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていて多くの聖なる人々のからだが生き返った。彼らはイエスの復活の後で、墓から出て来て聖なる都に入り、多くの人に現れた〉(51-53)。これらは既に見たように、またここで予め復活のことまで言っているように、イエスが死に打ち勝たれたことを意味しています。イエスの十字架の死は、既に死に打ち勝った死でした。また、イエスご自身の復活だけでなく、神を信じイエスを信じる聖徒たちの復活までも射程に入れ、目指し、約束した死だったことを意味しています。最後に、〈百人隊長や一緒にイエスを見張っていた者たちは、地震やいろいろな出来事を見て、非常に恐れて言った。「この方は本当に神の子であった。」〉(54)。このときのユダヤ人たちはイエスが神の子であることを傲慢にも頑なに認めませんでした。異邦人の彼らは（おそらくそのときの「理解」は不十分だったろうが）神を非常に恐れ、素直に認め、告白したのです。

私たちが同じ告白をし、イエスを更に正しく知り、信頼し、賛美して歩みましょう。